

HAKUBI 15TH ANNIVERSARY

次世代白眉等若手研究者はぐくみ基金

次世代のトップ研究者を応援しませんか？

多様な分野の若手研究者にご支援を！

京都大学では次世代を担う若手研究者向けに、白眉プロジェクト(自由かつ独創的な発想で課題に挑戦する研究者を、学術分野を問わず世界中から募り5年間支援する、京都大学独自のプログラム)、L-INSIGHT(世界トップクラスの研究者を育成するためのプログラムの開発・実施を行う事業)、学内ファンドによる支援等を実施しています。

国立大学を取り巻く財政的な状況は厳しさを増しており、新たに優秀な若手研究者を発掘・雇用・育成していくためには、安定した財政基盤を独自につくっていく必要があります。京都大学の次世代の学術を担う若手研究者を総合的に支援していくため、この度「次世代白眉等若手研究者はぐくみ基金」を設立しました。

大学が主体となって本基金を活用し、白眉センターや総合研究推進本部が実施する事業等を通して若手研究者への各種の財政的支援を提供する計画です。あらゆる分野での研究環境の改善や、異分野交流の活性化を促すとともに、将来的に世界トップクラスの研究者となり得る若手研究者を育成していきます。

基金の用途

- 若手研究者の活動支援
- 若手研究者の研究活動に要する費用
 - 若手研究者の研究活動の成果を発表するために必要なものを負担する費用
 - 若手研究者と異分野の研究者など他の有識者との交流を促進する費用

このプロジェクトへ寄付する >



京都大学白眉センター

The Hakubi Center for Advanced Research, Kyoto University

<https://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/>



京都大学白眉センター
創立15周年記念誌

はじめに

京都大学次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」が2009年に始まったことを機に次世代研究者育成センターが設置されました。2012年の白眉センターへの改称を経て、2024年に創立15周年を迎えることができました。創立を記念するイベントについては、当初、創立10周年を迎える2020年に開催することを企画しておりましたが、新型コロナウイルスの流行により、実現に至りませんでした。そこで、開催できなかった10周年記念イベントの分もあわせて、世代を超えて互いに切磋琢磨してきた研究者と、これまで支えてくださった皆様が集まって盛大に祝い、交流することのできる機会になればとの思いから、今回の企画がスタートしました。発案から丸一年をかけて学内外の関係者や白眉研究者との調整を行い、1月25日には白眉の日（ホームカミングデー）、同26日には記念式典・シンポジウムを開催するに至りました。

当日は、白眉プロジェクトにゆかりのある方の想いや、所属した白眉研究者の活躍を紹介するだけでなく、白眉プロジェクトの歩みを振り返り、今後の展望を見通す多様な議論が展開される機会となりました。本冊子では、記念式典・シンポジウムを中心とした一連のイベントの様子を写真と文章で紹介しております。関係者の想いや白熱した議論の臨場感を味わっていただけますと幸いです。

白眉センター一同

CONTENTS

02	はじめに	第二部 シンポジウム——パネルディスカッション
03	白眉の年表	10 I 白眉プロジェクトの過去・現在・未来【前半部】 12 II 白眉プロジェクトの過去・現在・未来【後半部】
第一部 記念式典		
04	挨拶 湊 長博 / 北川 進	14 集合写真
05	来賓祝辞 井上 諭一 / 松本 紘	16 第三部 祝賀会
第二部 シンポジウム——講演		
06	白眉プロジェクトから 化学反応設計の革新へ 前田 理	18 伯楽委員よりメッセージ
07	ダイバーシティ経営と企業価値 COLPAN, Asli M.	19 あとがき 表紙デザインについて / 奥付
08	僕には鳥の言葉がわかる ～動物言語学の幕開け～ 鈴木 俊貴	

式典日時 2025年1月26日(日) 13:00－19:30 (受付12:30～)
会 場 ホテルグランヴィア京都 5階 竹取の間・古今の間

白眉の年表

年度	京大総長	白眉センター長	専任PM	兼任PM			トピックス	採用人数	※うち()は部局連携型	
2009年	松本 紘 第25代						▼9月「次世代研究者育成センター」を設置			
2010年		伏木 亨	田中 耕司	浅野 耕太			▼物質・細胞統合システム拠点西に事務室配置	1期 17		
2011年							▼2期生が着任 「〇期生」と呼ぶ文化が始まる	2期 19		
2012年			堀 智孝		瀬原 淳子	石川 尚人	伊勢田 哲治	▼4月「次世代研究者育成センター」を「白眉センター」に改称 ▼第1回白眉の日、ホームカミングデーが開催	3期 19	
2013年		田中 耕司							4期 19	
2014年									5期 18	
2015年	山極 壽一 第26代	光山 正雄			松井 啓之	谷 史人	▼白眉プロジェクト制度の見直し		6期 18	
2016年			出口 康夫	生田 宏一	船曳 康子		▼部局連携型による採用スタート ▼白眉研究者の採用が合計で100名を越える ▼学術研究支援棟に移転		7期 15(5)	
2017年			高見 茂						8期 16(5)	
2018年		赤松 明彦		小野澤 透		小川 正			9期 13(1)	
2019年			赤松 明彦						10期 13(3)	
2020年	湊 長博 第27代								11期 10(4)	
2021年							▼部局連携型採用の最後の期 ▼白眉研究者の採用が合計で200名を越える		12期 16(2)	
2022年							▼女性活躍推進に向けた採用、その他見直し検討期間			
2023年		高倉 喜信	高倉 喜信						13期 20	
2024年					伊藤 貴浩		▼白眉研究者が、受け入れ教員となる ▼文部科学省「卓越研究員事業」の公募終了 ▼1月 白眉センター創立15周年記念式典・シンポジウムを開催		14期 20	
2025年									15期 20	

※採用期間は原則5年間
※活動はおよその時期を示す
※PM：プログラムマネージャー

第 一 部 記 念 式 典

挨 拶



湊 長博

MINATO Nagahiro

京都大学 第27代総長

京都大学医学博士。専門は免疫学。米国アルバート・アインシュタイン医科大学研究員、自治医科大学助教授などを経て、1992年に京都大学医学部教授に就任。2010年京都大学大学院医学研究科長・医学部長、2014年京都大学理事・副学長、2017年10月よりプロボストを務めた後、2020年10月から現職。総長就任後も教員の多様性の確保を目指し、白眉プロジェクトを積極的に推進している。



北 川 進

KITAGAWA Susumu

京都大学 理事(研究推進担当)・副学長

京都大学大学院工学研究科博士課程修了。専門は錯体化学。近畿大学理工学部助教授、東京理科大学理学部教授などを経て、1998年から京都大学大学院工学研究科教授。2007年から京都大学物質－細胞統合システム拠点(iCeMS)副拠点長、2013年から同拠点長の任に就いたのち、2024年から現職。2017年から京都大学高等研究院特別教授、2025年から京都大学総合研究推進本部長も務める。白眉プロジェクトには第15期から研究推進担当理事として参画し、伯楽会議では自然科学系分野の面接も担当した。

本日は、京都大学白眉センター創立15周年記念式典およびシンポジウムにあたり、多くの皆さまにお越しいただき、厚く御礼申し上げます。

白眉プロジェクトは、学術研究における次世代のグローバルリーダーを育成支援することを目的として、2009年（平成21年）9月に松本 紘 元総長の発案により開始されました。学術領域を問わず自らの独創的な研究課題を持つ若手研究者を世界中から公募し、5年間にわたって制約や義務を設けることなく自由に研究できる環境を提供するという、かつてない画期的な取り組みでした。

このプロジェクトは、やがて世界のアカデミック・コミュニティに大きなインパクトを与え、毎年国内外より、人文科学から自然科学に至る分野において、数十倍に及ぶ応募が続いています。また。選抜にあたっては、単なる業績主義ではなく、多くの識者の方々による面接で動機や独創性を重視する「白眉方式」を取り入れています。

このようにして今日までの15年、257名の白眉研究者を採用、そのうち約190名がすでにプロジェクト任期を終え、本学を含む、国内外の研究機関や大学でめざましい活躍をされています。京都大学は今後も「自由の学風」を堅持し、学術のフロンティアを切り拓く若手研究者を支援する場として、引き続き白眉プロジェクトを推進していく所存です。

これまで皆さまからいただきました白眉センターへのご支援に改めて御礼申し上げるとともに、今後の発展に向けて、より一層のご支援を賜りますよう心からお願いを申し上げて、私からの挨拶に代えたいと思います。

みなさま、こんにちは。京都大学研究推進担当理事・副学長の北川です。本日は白眉センター創立15周年記念式典およびシンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございます。

白眉プロジェクトには3つの特徴があります。第一に、5年間自由に研究に専念できる環境、第二に、人文社会学から自然科学まで幅広い分野の研究者が集う多様性、第三に、国際的な研究ネットワークの構築です。

この15年間、白眉研究者たちは互いに刺激し合い、新たな知見を開拓しながら、世界と連携して優れた研究成果を生み出してきました。

世界はいま転換期を迎えています。現在、気候変動や少子高齢化、新技術の発展など、未曾有の課題に直面しています。これらを解決するには、革新的なアイデアと多彩な才能が必要です。時代の要請にこたえ、白眉プロジェクトには、今後も世界をリードする研究者を育成する役割が期待されています。

また、本年1月には「総合研究推進本部」を立ち上げ、研究支援機能を統合しました。研究支援に関する機能を執行部直轄の本部組織にまとめ上げ、教員や事務職員、そしてURAなどの専門人材がフラットに一体となって、研究推進のミッション遂行にあたります。今後も若手研究者が自由に研究できる環境を整え、支援を続けてまいります。皆さまのご協力をお願い申し上げ、挨拶といたします。ありがとうございました。

H A K U B I 1 5 T H

来 賓 祝 辞



井 上 諭 一

INOUE Yuichi

文部科学省科学技術・学術政策局長

九州大学工学部卒業。1991年同大学院工学研究科を中退し科学技術庁入庁。これまで、日本の地震調査研究体制の整備、スーパーコンピュータ「京」の開発、海洋資源調査システムの開発、給付型奨学金制度の創設、AI戦略の策定などに従事。2001年から2004年の間、在ドイツ日本大使館で科学アタッシュ、2022年G7科学技術大臣会合では我が国シエルバを務めた。2024年7月より現職。

文部科学省の井上です。京都大学白眉センター創立15周年を心よりお祝い申し上げます。創設時から現在までプロジェクトを支え続けてきた関係者の皆様に敬意を表します。

白眉プロジェクトは、研究に専念できる環境を提供し、学務や教務を免除する画期的な制度です。導入時には学内の反対もあったかもしれませんが、関係者の覚悟と決断の賜物です。

このプロジェクトは、国内にとどまらず、世界中から研究者を公募し、多様な分野の人材を受け入れています。内輪の選考ではなく、門戸を広く開いた点が特筆すべき点です。

若手研究者に年間最大400万円の研究費を提供する制度も大変貴重です。大学の基盤的経費が削減される中で、この仕組みを維持し続けていることは素晴らしいことです。これまでに257名が採用され、応募者総数は約6500人、平均倍率は26倍です。厳しい選考を乗り越えた優秀な研究者が、自由な環境で成果を上げています。

「白眉」というネーミングは、このプロジェクトが、聞いただけでTOP of The TOPのものだとわかります。そして文学的でもあり、知性も感じさせ、プロジェクトの卓越性を象徴しています。官公庁の命名とは一線を画し、洗練された名称です。

国際的な人材獲得競争は激化しており、日本は報酬や国際性の面で苦戦しています。しかし、白眉プロジェクトのさらなる発展により、世界の研究者が集う場となることを期待します。

白眉プロジェクトが日本の若手研究者育成を牽引、発展し続けることを祈念し、あらためて15周年のお祝いを申し上げます。



松 本 紘

MATSUMOTO Hiroshi

公益財団法人国際高等研究所 所長
国立研究開発法人理化学研究所 名誉理事長
京都大学 第25代総長

京都大学工学博士。専門は宇宙物理学。京都大学工学部助教授、スタンフォード大学客員研究員、京大大学生存圏研究所教授・同所長等を経て、2008年10月から2014年9月まで京都大学第25代総長。2015年4月から2022年3月まで理化学研究所理事長。2018年4月から現在まで国際高等研究所長を務める。総長在任中は多方面にわたる様々な改革を主導した。白眉プロジェクトにはその立ち上げから研究者の選考に至るまで尽力し、現在に続くプロジェクトの礎を築いた。

本日は、白眉センター創立15周年記念式典およびシンポジウムにお招きいただき、誠にありがとうございます。2009年に始動した白眉プロジェクトが15周年という節目を迎え、多くの優れた若手研究者を輩出できたことを、大変誇らしく思います。これも関係者の皆さま一人ひとりの努力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

京都大学は、自然科学から人文社会科学に至る幅広い研究分野で伝統を築いてきました。しかし、私が総長を務めていた当時、世界レベルの研究競争に勝ち抜くためには、伝統に安住せず、教員が日々切磋琢磨し続けることが不可欠だと考えました。そのため、教育研究に専念できる環境を整え、部局を越えた全学的な支援を行い、優秀な若手研究者を確保・育成することが、京都大学の未来にとって最も重要であると判断しました。こうした考えのもと、白眉プロジェクトを立ち上げたのです。

プロジェクト名を決める際、中国の故事に由来する「白眉」と「伯楽」という言葉に注目しました。「白眉」は最も優れた人物を指し、「伯楽」はそうした人材を見抜く存在です。優秀な研究者を採用することは当然ながら、真に卓越した人材を見出すことも重要です。そのため、各分野の卓越した識者の方々に「伯楽委員」として選考に関わっていただきました。白眉という名称が定着し、15年間の歩みを経て「京大の白眉」として確固たる地位を築けたことを嬉しく思います。

今後20年、30年とこのプロジェクトを発展させるには、国際的な知名度をさらに高めることが重要です。白眉研究者たちが国内にとどまらず、グローバルな舞台でその名を知られる存在となり、白眉プロジェクトが世界の研究者にとって目指すべき称号となることを願っています。15周年を迎えた今、白眉プロジェクトの未来はさらに広がりを見せることでしょう。本日、この特別な日を皆さまと共有できることを嬉しく思います。今後もプロジェクトの発展を見守り、応援し続けたいと思います。

A N N I V E R S A R Y

講演

白眉プロジェクトから 化学反応設計の革新へ

前 田 理

MAEDA Satoshi

北海道大学化学反応創成研究拠点 拠点長
同 大学院理学研究院 教授
(白眉第1期)

2007年東北大学大学院理学研究科博士課程修了(理学)。白眉在籍時の研究課題名は「反応経路自動探索法による生化学反応機構の系統的量子化学的解明」。白眉離職後は、北海道大学大学院理学研究院助教・同准教授を経て同教授。2018年より北海道大学化学反応創成研究拠点拠点長を兼務。



北海道大学の前田です。本日はこのような機会をいただき、大変感謝しております。私は白眉プロジェクトの第1期生として助教を務め、その後、北大に移りWPI-ICReDDの拠点長やERATOプロジェクトの研究総括を務めています。現在進めている研究の基盤は白眉で見つけた研究シードによるもので、そこから多様な融合研究を経て発展してきました。本日は、ICReDDの概要と研究シードの発展、さらに白眉プロジェクトが私の研究人生に与えた影響についてお話しします。

ICReDDでは、計算、情報、実験を融合させ、化学反応の設計と発見を革新することを目指しています。化学反応は、安価な材料を有用な物質に変換するため極めて重要ですが、開発には時間がかかるという課題があります。そのため、ICReDDは計算科学、実験科学、情報科学を統合し、反応開発の効率化を図っています。ICReDDには約90名の研究者が所属し、その半数が外国籍です。また、ノーベル化学賞受賞者であるベンジャミン・リスト教授も研究に参画し、国際的な融合研究を推進しています。

私たちは、化学反応の経路を第一原理に基づいて自動探索する、反応予測技術を開発しました。この技術により、目的の化合物を合成するための適切な反応経路を特定し、実験にフィードバックすることが可能になりました。例えば、この手法を用いて、従来合成困難だったジフロオログリシン誘導体の合成法を見出しました。さらに、この技術を応用し、力がかかると硬くなるハイドロゲルの設計にも成功しました。分子の反応性を理論的に予測し、実験を通じて確認することで、より機能的な材料開発を実現しています。

また、情報科学を活用し、触媒設計の最適化を進めています。例えば、リスト教授のグループが開発した触媒をデータ解析し、ロボット合成装置を活用して実験データを取得・解析し、新たな触媒条件を発見しました。さ

らに、ペイズ最適化を用いたクローズドループシステムを導入し、反応最適化を完全自動化することに成功しました。このシステムは、実験結果を自動分析し、最適な条件を見出すことができます。例えば、ある反応では、初め10%の収率だったものが、自動最適化により50%に向上しました。

化学反応のデータベース構築も進めており、AIを活用した反応機構の予測技術を開発中です。未知の化学反応を予測するには、反応素過程を詳細に解析し、反応経路ネットワークを構築する必要があります。従来困難だったこの課題に対し、私たちは分子のパーツをレゴブロックのように組み合わせる手法を開発し、計算科学を駆使して網羅的に反応探索を行っています。この技術は白眉プロジェクトの初期に着想し、短期間で論文発表に至りました。さらに、グラフ理論を応用し、化学反応の予測精度を向上させています。

白眉プロジェクトでの経験は、私の研究人生に大きな影響を与えました。特に、プロジェクト開始時に「5年間は研究成果を求めなくてよい」という言葉をいただき、自由な発想で研究できたことが現在の成果に繋がっています。また、異分野融合やリーダーシップの重要性を学び、多様な研究者と議論を重ねる機会を得ました。ICReDDでの融合研究が成功しているのは、白眉での経験があったからこそだと感じています。

さらに、白眉での厳しい面接経験は、プレゼンテーションや質疑応答への耐性を養うのに役立ちました。WPIの面接では、多くのノーベル賞受賞者や学部長が審査員として参加し、非常に高いレベルの質疑が求められました。この経験があったからこそ、現在の研究活動に自信を持って取り組んでいます。白眉プロジェクトで得た経験と支援のおかげで、私の研究は大きく発展し、ICReDDでの研究に活かされています。この場を借りて、白眉プロジェクトに関わる全ての方々に心から感謝申し上げます。

ダイバーシティ経営と 企業価値

COLPAN, Asli M.

京都大学経営管理大学院 教授
同 大学院経済学研究科 教授
同 理事補
(白眉第2期)



英国リーズ大学経営工学修士、京都工芸繊維大学工学博士。白眉在籍時の研究課題名は「国際比較の観点から見たビジネス・グループ:理論的分析と実証的考察」。白眉後は、京都大学経済研究所と経営管理大学院准教授を経て、2018年より現職。ハーバード・ビジネススクールチャンドラー客員教授、MIT スローンビジネス・スクール客員教授、コロンビア大学日本研究センター併任准教授を歴任。

京都大学経営管理大学院のアスリ・チョルパンです。私は白眉プロジェクトの第2期生として選ばれ、ハーバード大学やMITのビジネススクールに1年半滞在した後、京都大学に戻り、現在は経営管理大学院と大学院経済学研究科の教授を務めています。また、北川進先生の理事補佐として大学本部の仕事にも携わり、関西ペイントや住友ゴムの社外役員としても活動しています。専門分野は企業戦略、コーポレートガバナンス、経営史であり、これまでにオックスフォード大学出版を含む4冊の書籍や論文を発表してきました。

私の研究の一環として、女性役員の育成にも取り組んでいます。取締役会のダイバーシティの重要性を研究してきたことから、研究だけでなく、実際に女性役員を育てることが必要だと考え、湊総長のサポートを得て、企業から派遣された女性を対象とした役員育成プログラムを立ち上げました。

私の研究テーマの一つである取締役会のダイバーシティについて説明します。取締役メンバーの異質性、特にジェンダーの観点から見ると、日本の進展は遅れています。ヨーロッパではフランスやノルウェーなどの国々が法的に女性比率を規制しており、アメリカでは州による違いがあるものの、資本市場の圧力によって女性取締役の増加が進んでいます。例えば、ゴールドマンサックスは、取締役会に最低2人の女性がいなければIPOを認めないというルールを設けています。

一方、日本の企業における女性取締役の割合は2023年時点で約9.1%ですが、社内取締役に限定すると2%と非常に低い水準です。これはフランスの45%、アメリカの29%と比較しても遅れが顕著です。また、54か国のランキングでは日本は49位で、アラブ首長国連邦やサウジアラビアと同程度の水準です。しかし、2013年から2017年にかけて、女性がない企業の割合は減少しており、少しずつではありますが進展が見られます。

ダイバーシティの重要性を経営学的に説明すると、上層部理論によると、ジェンダーによる価値観の違いが意思決定に影響を与えます。ダイバーシティが高い取締役会では、新しい意見が持ち込まれ、イノベーションが促進されます。女性役員はCSR強化やリスク管理向上に寄与し、長期的な企業価値を高める効果が期待されます。

しかし、女性役員の増加と企業業績の関係については、議論が分かれています。財務業績の向上と女性役員数の増加には相関関係があるものの、因果関係は明確ではありません。例えば、業績が向上している企業が積極的に女性役員を登用している可能性もあります。アメリカの研究によると、女性役員を増やしてもROA(総資産利益率)には影響がなく、市場価値(Tobin's q)はむしろ低下するという結果が示されています。

この現象の要因として、以下の4つが考えられます。第一に、企業が表面的な数合わせのために女性役員を増やしている可能性があること。第二に、十分な数の女性が取締役に参加していないこと。第三に、女性役員の影響が企業業績に反映されるまでに時間がかかること。第四に、投資家が女性役員の増加を社会的目的の達成とみなし、企業価値の最大化を軽視していると判断することです。

これらの課題を克服するためには、女性役員の数を単に増やすのではなく、実際に意思決定に参加できる環境を整えることが重要です。研究によると、取締役に女性が1~2人いるだけでは影響は限定的であり、効果を最大化するには30%以上の比率が必要とされています。日本でも最近、この30%という目標が掲げられるようになっており、今後の変化が期待されます。

白眉プロジェクトの5年間で得た自由な研究環境は、私の研究の発展に大きく寄与しました。この場を借りて、白眉プロジェクトおよび京都大学の関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。



僕には鳥の言葉がわかる ～動物言語学の幕開け～

鈴木 俊貴
SUZUKI Toshitaka

東京大学先端科学技術研究センター 准教授
(白眉第9期)

2012年立教大学大学院理学研究科博士後期課程修了(理学)。
白眉在籍時の研究課題名は「鳥類をモデルに解き明かす言語機能の適応進化」。白眉退職後は、東京大学卓越研究員・准教授として、同学先端科学技術研究センターに着任。現在、「動物言語学」という新たな学問領域の確立を目指して励んでいる。



私は白眉の2年目に「動物言語学」の必要性を感じ、この分野を立ち上げました。これまで言語は人間に固有とされてきましたが、シジュウカラの研究を通じて、それが動物にも存在することを明らかにしました。本日は、その発見の経緯と動物言語学の現状についてお話しします。

シジュウカラは、縄張りを宣言する「ツツピー」のほか、天敵の接近時に異なる鳴き声を使い分けます。特に、蛇が接近すると「ジャージャー」と鳴くことを発見しました。さらに、この鳴き声をスピーカーから流すと、シジュウカラは蛇を探し始め、巣箱や藪を覗く行動を示しました。これは単なる警戒ではなく、「ジャージャー」が「蛇」を意味する言葉である証拠となりました。

この発見をさらに検証するため、見間違い実験を行いました。人間が「ウサギ」と聞けば、曖昧な図をウサギとして認識するのと同様に、シジュウカラが「ジャージャー」を聞いた後、枝を蛇と見間違えるかを調べたのです。その結果、ジャージャーを聞かせたときだけ、シジュウカラは枝を確認しに行きました。これは、単なる恐怖の伝達ではなく、シジュウカラが「蛇」をイメージしている証拠と考えられます。

シジュウカラは単語を組み合わせる能力も持っています。「ピーツピ(警戒)」と「チヂチ(集まれ)」を組み合わせ、「ピーツピチヂチ」という二語文を形成し、仲間を呼び集めて天敵を追い払うのです。興味深いことに、語順が逆になると(チヂチピーツピ)、シジュウカラは正しく反応しませんでした。この発見は、言語の文法構造がシジュウカラにも存在する可能性を示唆しています。

また、シジュウカラは鳴き声だけでなく、ジェスチャーも用いてコミュニケーションを取っています。巣箱の入り口で「お先にどうぞ」と翼をパタパタ動かす行動が観察されました。これまでジェスチャーは人間や類人猿に限られると考えられていましたが、鳥類にも存在することが判明しました。

さらに、シジュウカラの言葉は他の鳥にも理解されています。スズメは、シジュウカラの警戒音を聞くと即座に安全な場所へ避難します。つまり、動物たちは異種間でも情報を交換しているのです。それにもかかわらず、人間は「言語は人間にのみ存在する」と長らく考えてきました。動物言語学は、この固定観念を覆し、動物のコミュニケーションの新たな理解を生み出す学問です。

こうした研究の成果をまとめた初の著書出版しました。また、ISBEという国際学会で基調講演を行い、動物言語学の概念を広める機会を得ました。さらに、東京大学に世界初の「動物言語学」研究室を設立し、今年12月には英国の動物行動学会からアジア人初の最も荣誉ある賞を受賞することになりました。

白眉プロジェクトの4年間は、私にとってかけがえのないものでした。世界に評価される研究ができたのは、白眉のおかげです。この場を借りて、心より感謝申し上げます。



第 二 部 シ ン ポ ジ ウ ム

パネルディスカッション

I——白眉プロジェクトの過去・現在・未来【前半部】

前半は白眉研究者たちのディスカッション。

6名それぞれが持つ、白眉プロジェクトへの思いを世代を超えて語り合った。

最後に白眉研究者が作った川柳を発表した。

パネリスト

小石 かつら

KOISHI Katsura
関西学院大学文学部 教授
(白眉第3期)



榎戸 輝揚

ENOTO Teruaki
京都大学大学院理学研究科
准教授 (白眉第6期)



天野 恭子

AMANO Kyoko
京都大学大学院文学研究科
准教授 (白眉第8期)



田原 弘量

TAHARA Hirokazu
横浜国立大学大学院工学研究院
准教授 (白眉第12期)



フィオードロワ・アナスタシア

FEDOROVA Anastasia
京都大学白眉センター
特定准教授 (白眉第14期)



ファシリテーター

藤井 俊博

FUJII Toshihiro
大阪公立大学大学院理学研究科
准教授 (白眉第9期)



白眉で印象に残ったこと

藤井 私が着任した際、「白眉セミナーは異種格闘技戦である」と教わりました。異分野の研究者と対話し、いかにわかりやすく説明し、興味を持ってもらえるかが大切だという教へは、私の研究姿勢にも大きく影響を与えました。また、「無理に成果を出そうとしなくていい」という言葉にも励まされました。

小石 「白眉の日」は私にとって特別なイベントでした。白眉研究者の子どもたちが集まり、科学の世界に触れる機会となりました。その中には私の息子もいました。その息子も今や高校3年生になり、理系の研究者を目指しています。両親ともに文学・哲学の研究をしているにもかかわらず、白眉の環境で育ったおかげでまったく異なる分野へ進むことを選んだのです。このように、白眉の影響は家族にも広がっていくのだと実感しました。



榎戸 京大白眉では「何をやってもいい、自由」という環境のもとで、さまざまな研究が生まれました。私は、宇宙で使われている検出器を応用し、雷や雷雲から発生する放射線を調べる研究に取り組みました。すると、予想外のことに、雷によって原子核反応が起こり、陽電子からの対消滅線を観測することができました。これは2014年の出来事で、その年の物理分野のトップ10ブレイクスルーのひとつに選ばれました。この研究を発展させる形で、理研の白眉では「シチズンサイエンス」と呼ばれる、市民とともに科学を文化として根付かせる活動にも取り組みました。

天野 私は20代に博士号を取得しましたが、30代の10年間は4人の子育てに専念し、所属を持たない状態で在宅研究をしていました。その後、40代から研究に復帰し、45歳で白眉研究者に採用されました。白眉での5年間を経て、50歳を過ぎてから専任の教員になりました。白眉プロジェクトが、若手研究者のみならず、私



のように異なる経歴や年齢を持つ研究者も受け入れてくれたおかげで、研究を続けることができました。

田原 私が白眉で特に印象に残っているのは、自由な研究環境の中で、研究者同士が積極的に交流する機会が多かったことです。コロナ禍で直接の対面が難しい時期もありましたが、オンラインイベント（研究の魅力を見出す“鏡”プロジェクト）や京都大学アカデミックデイなどを通じて、学外の方々と議論を交わすことができました。



アナスタシア 最近高倉センター長からお聞きしたことがあります。一度白眉の研究者になると、卒業しても白眉研究者っていう名前を使い続けることが一生できるんですね。

現役研究者に向けて

アナスタシア 白眉プロジェクトでは応募者の人数、性別、年齢などのデータが公開されており、選考過程の透明性が高い点が素晴らしいと感じました。



榎戸 白眉では「好きなことに専念してよい」とされ、実際に自由な研究時間が保証されていました。しかし現在は、学務や委員会などに追われ、時間の確保が難しくなっています。だからこそ、白眉時代の自由な時間の価値を改めて実感しています。

研究者にとって、無駄な時間は決して無駄ではなく、次の発見への準備期間です。

小石 私は白眉に採用されたあとに産休に入り、「せっかく白眉なのに、全然時間がない」と焦っていたのですが、そのとき松本先生が「その分、長い目で考えたらどうだ」と言うてくださり、「たとえば65歳の定年を70歳定年と考えればいいじゃないか」と励ましてくださいました。その言葉に、私はとても救われました。

田原 白眉で面白かったのは、文系理系ともにあらゆる分野の研究者が集まっていて、どんなことでも質問し放題だったことです。現役の白眉の皆さんも、ぜひ研究セミナーなどで発表者にどんどん質問してほしいですね。

天野 白眉を離れてから、「やっぱり白眉っておもしろいな」とあらためて実感します。自分の専門分野ももちろん面白くて大事ですが、白眉の面白

さは白眉ならではのものと強く感じています。今でも、イベントがあると積極的に参加しています。ありがたいことに、白眉のOBOGも温かく迎え入れてもらえる文化があり、本当に素晴らしいと思います。

藤井 私が印象に残っているのは、「白眉では研究分野の同期ができる」ということでした。白眉の研究者はそれぞれ着任の時期も違えば、専門分野もバラバラです。しかし、みんな「5年間という限られた時間で成果を出してやるぞ」という強い思いを持って集まっています。その結果、生まれる相乗効果の大きさを実感しました。白眉で素晴らしい同期に出会えたことを、本当に良かったと感じています。



白眉川柳

人と学 つながりひろく HakuBingo (藤井)
白眉ならメンデルスゾーンも海賊に (小石)
大学を「退社」してから 科学する (榎戸)
研究バカでええやん、うちら (天野)
好きなこと 楽しんだもん勝ち 白眉人 (田原)
白眉内定 ここは京都のハグワーツ (アナスタシア)
垣根なく 語らう姿が 博美かな (包)
ジャングルで かまれたヒルのきずあとに
ニベアぬりつつ 想うフィールド (海老原)



Ⅱ——白眉プロジェクトの過去・現在・未来【後半部】

ディスカッション後半は6名が登壇。

15周年に至るまでの尽力の積み重ね（歴史）を風化させずに次代に伝えるねらいで、これまでの運営サイドでの思いや苦勞を率直に語る場を設けた。

パネリスト

井上 諭一

INOUE Yuichi
文部科学省
科学技術・学術政策局長



長谷川 真理子

HASEGAWA Mariko
独立行政法人日本芸術文化振興会
理事長



田中 耕司

TANAKA Koji
京都大学 名誉教授
同 元・白眉センター長



湊 長博

MINATO Nagahiro
京都大学 第27代総長



高倉 喜信

TAKAKURA Yoshinobu
京都大学 副学長(学生支援担当)
同 白眉センター長



ファシリテーター

小川 正

OGAWA Tadashi
京都大学高等研究院
特定教授



創成期の苦勞

田中 私は松本総長の要請で白眉プロジェクトのプログラムマネージャーを務めました。若手研究者を支援するこの試みは素晴らしく、定年退職後でどれだけ続くかわからないけれど、がんばろうと思いました。特に「白眉を伯楽が選ぶ」という仕組みが印象的でした。目利きが評価して初めて成立するのが白眉ですから、このネーミングの妙に感心しました。

立ち上げには松本総長と研究推進部の尽力が大きく、特に事務職員の熱意は目を見張るものでした。法人化後の大学財政の厳しさの中で、多額の予算を投じたことは注目を集めました。初年度から国際的に多くの応募があり、プロジェクトの成功が証明されました。強調したいのは、「大学の執行部と事務職員が一丸となって、このプロジェクトを作り上げた」点です。

湊 白眉プロジェクトの立ち上げにあたっては、部局から「多額の資金を投じるのは妥当なのか？」というような強いご指摘もありました。特に当初、

「5年間自由に研究できる」という方針に対して厳しい意見が寄せられました。しかし、私は「これはやるべきだ」と決意し、後発の文部科学省による「卓越研究員事業」とも組み合わせることで、部局の理解を得ながら存続を図りました。

最終的に白眉プロジェクトは独自資金で運営され、国立大学では前例のない規模となりました。多くの優秀な研究者が輩出され、多様な研究成果が発信されている現状を目の当たりにし、それが正しい選択だったと確信しています。

伯楽会議の意義と難しさ

小川 伯楽会議（白眉センターの面接審査）では、研究の成果だけでなく、研究者としての人物像も重視し、次世代を担う資質を持つかどうかを面談審査で判断します。これまでの白眉研究者の選考が成功してきたのは、伯楽委員の目利きの



力によるものです。委員の先生方のご尽力で、優れた研究者が選ばれ、白眉の成果が生まれているのです。

本プロジェクトの主体はもちろん白眉研究者であります。白眉センターの創立15周年を迎えるにあたり、現在の白眉の姿になるまでにあった関係者による尽力の積み重ね（歴史）を風化させず、次代に伝えることは重要なことと思われます。白眉研究者や大学関係者を含む多くの方に知っていただく機会とする他、将来、白眉研究者や白眉プロジェクトに携わっている運営者に先人の思いを伝えられるようにしたいと思います。白眉プロジェクトの運営関係者のみなさまに、これまでの運営サイドでの思いや苦勞を率直に語っていただきたい。

長谷川 8年間伯楽委員を務めました。大変な仕事でした。白眉に選ばれる研究者には、「本当に好きでやりたくてしょうがない」という強いパッションがあり、その情熱が専門外の人にも伝わる表現力を持っています。そして、専門分野だけでなく、他分野にも目を向け、広げていこうとする姿勢があることが重要だと感じました。私たちがそうした人を選んできたことは間違っていなかったと、今日あらためて確信しました。

田中 白眉研究者の選考過程で最も印象に残っているのは、伯楽委員会の審査結果が出た後の松本総長との調整でした。委員会の結果は覆りませんでした。二次審査の候補者全員と面接した総長との意見交換が最も大変な仕事だったと記憶しています。

湊 目利きのプロセスそのものが非常に重要で、日本の行政機関でもあまり成功例がないところです。その中で、京大の白眉プロジェクトにおける伯楽会議は成功したケースの一つであると思います。今後も白眉のシステムを継続・発展させるためには、この伯楽会議の仕組みをさらに強化していく必要があると考えています。

白眉存続の危機と未来

高倉 白眉プロジェクトが立ち上がった当初、部局長たちの間では批判的な意見が多くありました。法人化後の運営費削減の影響で各部局の定員が減少し、さらに白眉研究者が他大学へ移ってしまうケースもあり、部局にとってのメリットが感じに



くかったのです。しかし、文部科学省の「卓越研究員事業」が導入されたことで、一部の白眉研究者の雇用が支えられ、部局の理解も得られるようになり、プロジェクトの存続が可能となりました。2015年から2016年にかけては、白眉存続の危機がありました。しかしその後データを見ると、白眉研究者の25%が京都大学にポジションを得ており、各部局にも教授や准教授として残る例が増えてきました。現在は文部科学省の補助がなくなりましたが、自己資金で20人規模の採用を維持できています。

湊 白眉プロジェクトを存続させるために、文部科学省の「卓越研究員事業」を活用するのは、苦肉の策でもありました。あれがなければ、白眉プロジェクトはここまで続かなかったと思います。「とにかく白眉は残すべきだ」という思いで、なんとか継続させることができました。現在は、優れた研究者に京大で引き続き研究していただくための改善を図っており、今後さらに拡大を目指していきます。

井上 未来に向けて、白眉への期待には大きいものがあります。先ほどの話で、白眉存続の危機のときには「京大の学内に白眉研究者がとどまっていたほしい」という意見が多く出されたともお聞きしました。しかし、白眉研究者が世界に広がるからこそが、京都大学の財産です。日本の研究者が世界からこぼれ落ちることなく、世界の研究ネットワークとつながり、白眉が国際的な研究拠点となることを期待しています。

田中 白眉プロジェクトは15年続いています。しかし、「創業は易く守成は難し」という言葉の通り、制度を維持することが課題です。初期の白眉研究者は熱意にあふれ、活発に議論や交流を行っていましたが、年月とともに制度が当たり前になり、意識が変化してきたように思います。

白眉研究者は一生白眉です。新旧の研究者が協力し、垣根を超えた交流とコラボレーションを大切にしてほしい。白眉プロジェクトの継続には、白眉研究者自身のコミットメントが不可欠です。今後もこの貴重な取り組みを守り、発展させてください。





第三部 祝賀会

続いての三部の祝賀会。

伯楽委員を務める公益財団法人高輝度光科学研究センターの安藤慶明常務理事、東京大学の中西友子名誉教授から祝賀の言葉が寄せられた。

そして白眉センターの創始者である松本紘京都大学第25代総長が乾杯！仲間たちとの旧交を温めたり、代を越えてのつながりが生まれたり。

自由闊達な雰囲気なごやかな祝賀会となった。

閉会のあいさつでは、高倉喜信白眉センター長が未来に向けての研究者たちへの叱咤激励で締めくくった。



白眉研究者代表の前野ウルド浩太郎さんによるスピーチ。眉を白く塗る(=白眉)のパフォーマンスに会場は大盛り上がり。

京都大学白眉センター 創立15周年記念祝賀会



坂部綾香助教の基調講演

創立15周年シンポジウムの前日1月25日には、第14回白眉ホームカミングデー「白眉の日」が開催された。開会の言葉は高倉喜信白眉センター長。続いて、前半は10期である京都大学農学研究科の坂部綾香助教の基調講演が行われた。そして、後半はグループに分かれてのポスター作り。当日に提示された「世界政府：地球の救い方」「宇宙移住計画：新しい共同体の創設」というテーマに従って、日本語と英語を交えながら、お互いの学問分野の立場から真剣にディスカッションを重ねた。最終的にはポスターを制作。知性あふれる遊び心ある企画に、研究者たちの交流はより深まった。

日付：2025年1月25日(土) 13時-20時
場所：KKR京都くに荘



第14回

白眉ホームカミングデー

「白眉の日」



グループに分かれてのポスター作り

伯楽委員よりメッセージ

15周年を祝して、
伯楽委員の方から白眉研究者へ、
熱い応援メッセージをお寄せいただきました。
(順不同・敬称略)

研究に没頭する時間を大切に！
白眉の魅力を多くの人達に
伝えて下さい。
期待しています。

京都芸術大学学長
吉川 左紀子

・我が道を拓き進んで下さい、
ゴールがどこになるか、楽しみます。
・一番になって下さい。絶対になれます。
・面白いことをする/できることの大切さを実感
できました。白眉研究者 ありがとう。

公益財団法人
高輝度光科学研究センター常務理事
安藤 慶明

新しい、オリジナルの研究を
創造して下さい。
世界をリードする気概と
持つて かんばって下さい。
皆さんの活躍を楽しみにしています。
京都工芸繊維大学 亀井加恵子

京都工芸繊維大学副学長
亀井 加恵子

世界に輝く
京大白眉！

京都大学第25代総長
松本 紘

松本 紘

多くの候補者から選抜
されたことに自負と
矜持をもって、じっくり
取り組んでいて下さい！！

国立民族学博物館名誉教授
小長谷 有紀

「あなたの研究の革新は
何れ」
をいつも問い続けて下さい。

中西良子
東京大学名誉教授
中西 友子

白眉コミュニティは
一生もの。
新旧白眉の連携を
一生ものに。

白眉は終身タイトル
それを胸に
絶えず前進。

白眉センター元センター長
田中 耕司

みづさ
これまでの経験をもとにして、さらに
飛躍し、世の中も変えて下さい。
期待しております。

独立行政法人
日本芸術文化振興会理事長
長谷川 眞理子

長谷川 眞理子

研究と
社会
の
つながり
を
大切
に
し
て
い
き
ま
す
西村 いくこ

奈良先端科学技術大学院大学理事
西村 いくこ

あ と が き

京都大学白眉センター創立15周年記念式典・シンポジウムが無事終了し、また編纂作業を続けてきた本記念誌
も完成して安堵しております。記念行事にご臨席いただきましたご来賓の方々には、改めまして、ご多忙の折、お運
びいただいたことに心から感謝申し上げます。また本事業の開催準備・当日の運営にご尽力・ご協力頂きました全
ての関係者にも、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

当日のパネルディスカッションでも申し上げましたが、振り返ってみますと私が10年前に伯楽委員として白眉プロジェク
トに初めて関わった際には、後に自分が白眉センター長を拝命することなど夢にも思いませんでした。またその時期、
白眉プロジェクトが存続の危機にあったということを今回で知ることになりました。さらに、本来なら5年前の10周年とい
う非常に区切りの良い節目に記念行事が行われるべきであったところ、コロナ禍の影響で開催が見送られたため、
たまたま3年前に白眉センター長に就任させていただいた私が、創立15周年記念行事を担当させていただく幸運に
恵まれましたことに不思議な縁を感じております。設立から今日にいたるまで、白眉プロジェクトに関わられてきました全
ての関係者に深謝致します。

今回の記念事業は15年間の白眉プロジェクトの歴史を振り返り、京都大学白眉センターが次代を担う多くの若手研
究者を輩出し続けてきたことを実感できる絶好の機会となりました。先人から引き継がれてきたこの財産を次世代に繋
ぐべく、より一層努力する決意を新たにしております。今後とも白眉プロジェクトへのご支援を宜しくお願い申し上げます。

京都大学白眉センター長 高倉 喜信

京都大学白眉センター創立15周年記念誌

2025 年 5 月 15 日発行

編集発行 京都大学白眉センター

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL：075-753-5315
E-mail：hakubi[at]mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
<https://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/>

白眉センター創立15周年記念事業幹事

高倉 喜信 濱中 裕之 堀之内 豊
吉元 幸司 土屋 悠 飯田 圭輔
和田 晋輔 八木 智貴 可貴 悠子

編集協力 呉 玲奈

デザイン 森 華

撮 影 福尾 行洋

印 刷 株式会社プリントバック

Printed in Japan

本誌の無断複製、転載を禁じます

©2025 The Hakubi Center for Advanced Research, Kyoto University

※ 本誌に記載しております所属・役職は2025年1月26日現在のものです



表紙デザインについて

本冊子の表紙のメインビジュアルは、これまでの白眉研
究者たちの多彩な研究分野をイメージした複数のモチー
フを大きな「15」に重ね組み合わせ、国内外で学際的に
活躍・交流している白眉たちの、これまでの歩みとこれか
らの羽ばたきを表したものです。白眉15周年を記念する
オリジナルデザインをお楽しみください。